

8月5日 初恋

小学校の卒業式だった。一人ずつ体育館の舞台上に上がって卒業証書を受け取る。マンモス小学校だったので、卒業証書の授与だけでとてつもなく時間がかかった。こらえ性のない私は、硬い椅子の上で体をくねらせながら、耐えることで精一杯だった。

最後のクラスが登壇を始めた。もう少しだ、と思って舞台袖を見ると、見たこともない美少女が観客側を向いて立っていた。Kさんだった。後で知ったことだが、6年生の終わり頃に引っ越してきた転校生だった。

それまで「すき」とか「きれい」という感情は異性に対して抱いていたが、その時の感情は全く違うものだった。「ポーっとする」という表現が最も近い。私はポーっとしたまま彼女への思いを募らせて中学に入学した。

私は憧れの彼女と同じクラスになった。相変わらず清楚で美しい。人見知りで内気な私は、遠くから見ているだけで満足だった。

数日後、憧れの彼女が豹変する。眉を細く剃り上げて、そこらじゅうを掃除するような長いスカートで登校してきた。3、4人同じような格好の女子を引き連れて。

中間考査返却の時、彼女が初めて私に声をかけた。「愛川何点やったん」私が点数を答えると、「お前賢そうに見えるけど、結構アホやな」

不思議なことに、私の彼女に関する記憶はそこで途絶えている。それは、短い恋の終わりだった。

